作文コンクール県審査

最優秀2人 喜びの声

第69回全国小・中学校作文コンクールの県審査で最優秀賞に輝いた中学校の部の川口菫さん（山梨英和中3年）と、小学校高学年の部の佐野晴大君（身延町立身延小5年）の喜びの声と作品を紹介する。

【主催】読売新聞社
【後援】文部科学省、県教委
【協賛】ＪＲ東日本、ＪＲ東海、ＪＲ西日本、日本テレビ放送網
【協力】三菱鉛筆

中学校の部

川口菫さん

（山梨英和中３年）

同居で発見 祖父の一面

身近なテーマで作文を書きたいと思い、同居をきっかけに新しい一面に気づいた祖父のことをつづった。

「作文で家族への感謝の気持ちを伝えたかった。みんなが受賞を喜んでくれて、うれしい」と喜ぶ。

2年前から祖父母と一緒に暮らし、厳しいと思っていた祖父の印象ががらっと変わった。きっかけは祖父が祖母のために手作りしたフクロウの置物。「祖父がどんな人なのかを知ってもらいたくて、人柄が伝わるエピソードをたくさん盛り込んだ」と工夫を語る。

学校の授業などで作文を書くことはあったが、原稿用紙8枚に及ぶ大作は初めて。「作文は得意じゃなかったけど、自信がついた。身近なことを自分なりの言葉で書くのは楽しいと感じた」と話す。

9日に行われた表彰式には、両親とともに祖父母も出席してくれた。「文章にすることで、家族や自分自身を改めて振り返るきっかけになった。これからも作文を通じて様々なことを伝えられたら」と力を込めた。

「祖父と私」川口菫

父方の祖父母と同居するようになって二年目のある日のこと、祖母はいつものように祖父宛ての郵便物を手渡しに二人の部屋に行った。

「菫、これすごいだろう。」

祖父は机の上を指差し、自慢気に言った。近付いてよく見ると、それは手作り感いっぱいのフクロウの置物だった。祖父母が山に散策に行った時に拾ってきた松ぼっくりで作った二羽のフクロウが、これもまた拾ってきた木の枝に仲よさそうに寄り添って止まっている。紙で作ったまん丸な目も愛らしい。おまけに、枝の下には小さな巣もつけられている。私はその置物のあまりの可愛らしさに目を見張った。

「明日のおばあちゃんの誕生日にこれをプレゼントするんだ。だから、まだ内緒だよ」

祖父はそう言ってにっこりと笑った。祖父が背中を丸め、せっせとなにかを作っていることは知っていた。普段から二人がとても仲が良いことは分かっていた。でも、祖父がこんなにも可愛らしいプレゼントを作っていたなんて思いもよらなかった。

「こっちの小さなフクロウはおばあちゃんで、こっちの大きいのは私なんだ。」

嬉しそうに言う祖父に小さな衝撃を受けた。それまでの私自身の祖父に対するイメージが大きく変わった瞬間だった。

四角い眼鏡がトレードマークの祖父は、現在七九歳。小柄ながら威厳ある彼は、息子である私の父とは違って、「真面目」という言葉がとてもよく似合う。

幼い頃の私の祖父に対するイメージは、「しつけに厳しく、少しロうるさい人」だった。いとこたちが集まる食事の席では、祖父の「足を崩さない！食べる時は正座をしなさい！」という注意が常に飛んでいた。しかし、子供たちにはずっと同じ姿勢でいるのは簡単ではない。少しでも楽な座り方をしようとすると、目ざとく注意をしてくる祖父はとても怖く、私は機嫌を損ねないよう出来るだけ大人しく、行儀よく振る舞っていた。

祖父はマナーに厳しいだけでなく、物知りで、人に教えることがこの上なく好きだ。

小学二年生の頃、「おじいちゃん、一ドルって日本円でいくらくらいなの？」と聞いた。祖父は「その時によって値段が変わるんだよ。どうして変わるのかっていうとね……」と説明に夢中になり、難しい単語を並べ、長々と話してくれた。私は「一ドルは大体百円ぐらい」などと簡単に教えて欲しかったのに。私は全然理解できず、聞き飽きてしまった。そして、祖父に何かを質問するのはもうやめようと、心に決めたのだった。

祖父母の家をリノベーションし、一年後に同居することが言われたのは六年生の時だった。祖父は歯科医で、父はその後を継いで、祖父宅の一階で開業している。祖父母も、もっそれほど若くはないことを考えると、近い将来一緒に暮らすようになることは何となく分かっていた。優しくて大らかな祖母が大好きだったし、新しい家での暮らしに対する期待も大きかった。でも、正直なところ、祖父と暮らすことには不安があった。これまでのように二人の姉と大騒ぎしてはしゃぐことはできないのか、部屋も常に綺麗にしておかなければ叱られそう、などと考えると、堅苦しい気がして憂鬱だった。そんなちょっと沈んだ気分から同居生活は始まった。

しかし、同居生活が始まると、次第に祖父のイメージは変わっていった。

ある日、愛犬のアミーが祖父の後をついて歩いていた。それに気付いた祖父は、「おー！なんだ、追いかけてきたのか。いい子だな」と赤ちゃんをあやすような声で話しかけて、優しく体をなでていた。祖父も、こんなに優しい言い方が出来るのだと驚いてしまった。

また別の日。祖母は抹茶プリンを作り、「お菓子の時間よ」と祖父を呼んだ。すると祖父は「おお、お菓子の時間か。」と、とても嬉しそうだった。「美味しいね」と小学生みたいな顔で食べる姿を見てびっくり。堅物の祖父は、甘いものなど口にしないと思い込んでいたからだ。

さらにまた別の日。父は祖父の誕生日のお祝いに、奮発して高級なフグ料理の店に家族全員を連れて行った。食べ終わった後、祖父は驚くべきことを言った。

「本当を言うと、フグのどこが美味しいか、さっぱり分からないんだ。それよりファミレスで色んなものを注文して、お腹いっぱい食べる方がずっといい。」

最高の親孝行をしたつもりだった父は唖然として「もう、ファミレスにしか連れてかない。」とぼやいていた。父の気持ちも分かるけれど、私はファミレスが好きという祖父に親しみがわき、面白い人だと思った。

このようなことは、一緒に生活しなければ気付くことが出来なかったと思う。また、私自身も少しずつ変わってきているのだろう。今まで、難しいとしか感じられなかった祖父の話が、面白いと思えるようになったのだ。幼い頃には理解できなかったことが分かるようになったのが嬉しく、自分から祖父と話すようになった。

特に印象に残っているのが、切手やコインの収集についての話だ。カラフルな切手や、古めかしいコインたちはとても美しく、見ていて飽きない。それだけでなく、それらの特徴やいわれを説明してくれる祖父の話も、とても面白い。同じ十円玉に見えても、硬貨の縁に溝があり、ギザギザになっているものは「ギザ十」と言うが、現在の十円玉には溝がないという話は特にギザ十が無いか探してしまう。

祖父は、父に医院を譲った今も、昔からの患者さんの診療を受け持っている。白衣の祖父はとても格好よく、生き生きしている。仕事をした日は若返って元気になり、とても機嫌がいい。やはり、仕事が好きで、誇りに思っているのだろう。そんな祖父の姿を見ると、尊敬の気持ちが湧いてくる。

同居して、祖父母の関係についても、私の印象は大きく変わった。祖母は、優しくて少し抜けたところがある。祖父はそんな祖母を口うるさく注意する。だから、以前は二人が仲良しというのが信じられなかった。おばあちゃんが我慢しておじいちゃんに合わせているのではないかと思っていたのだ。しかし、二人で囲碁をしたり、頻繁に出かけたりする姿を間近に見て、本当に仲が良いのだと実感するようになった。おおらかでちょっと「天然」の祖母と、厳格な祖父の絶妙な掛け合いはコントのようで、聞いていてとても微笑ましい。

以前の私は「厳しくて、怖い人」というフィルターをかけていたため、祖父の一面しか見えていなかった。しかし、フィルターを外すと、意外な面が見えてきた。口調は厳しいが、陽気で気取らない性格だ。また、自分に正直で、ジャンクフードが好きなど、気が若くて可愛い面もあることにも気付いた。そして、祖父と暮らすことで物の見方が変わり、自分自身の成長を感じることもできる。始めは少し気が重かったけれど、今では毎日が楽しい。

私は祖父から多くのことを学んできた。これからも、たくさんのことを教えて欲しいし、祖母と共に長生きして欲しい。そして、私も祖父の自慢の孫だと言ってもらえるよう、成長していきたい。

祖父母をかたどったフクロウの置物は、仲良しの二人の部屋で今日も仲睦まじく寄り添っている。